ART KISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE　Vol.3　2001.9.15

赤レンガ倉庫

黒大根&DADACHILD with マッコイ

ゼーロンの会「(舞台)ゴドーを待ちながら」

プレイベント第3弾

「ラスト・サマーナイト」と37.3(ミナ)℃の記憶

赤レンガ倉庫展示風景　[Final Meeting]出品作家／谷脇敬二、前田雪明、星加民雄、林　浩、岸　弘治、松永　壮、横山博之

8月3日から19日、「ラスト・サマーナイト」と銘打った、プレイベント第3弾を開催しました。これは今年の夏を最後に取り壊されることが決まっている、熊本駅前合同倉庫(株)所有の赤レンガ倉庫を、みんなで見送ろうという催しでした。「おとなシンポジウム『熊本の近代建築―現状と未来』」、現代美術展「ファイナル ミーティング」、そして最終日には春日小学校の皆さんによる「こどもシンポジウム『未来の春日のまちづくり』」など、大正時代からの空気を感じさせる倉庫の中で、様々なイベントが行われました。また8月5日には「GREEN BED PROJECT」を開催しました。一日限り、阿蘇の干し草を詰めた大きな四台のベッドを、上通りアーケードに設置し、みなさんに忘れかけていた草のやわらかさ、そしてなつかしい香りを思い出していただくことが出来ました。干し草初体験のこどもたちにも喜んでもらえました。

KOGAN-KOTOBA-ATLIER

「グリーン・ベッド・プロジェクト」
―懐かしい香り、草の思い出―

GREEN BED PROJECT

8/5 上通りアーケード

二〇〇一・中・一中・三月号より連載

ART DE GYAN（アート・ド・ギャン）

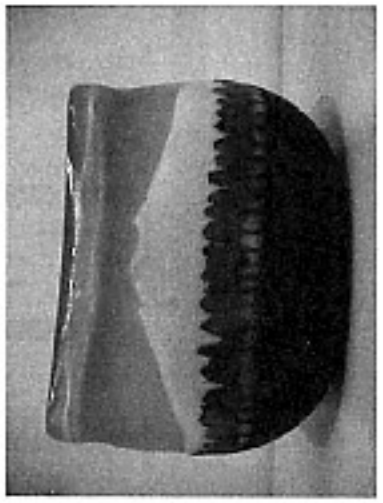
画廊主田中長徳の美術画廊

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 「絵画の価値は一体何処にあるのか」（中・四・一中・六）

● 「ゆるやかな抽象」（中・一〇・一中・一〇）

● 「東田直矢はいく世紀」（中・一一・一中・二月）



今泉篤男作品　田　茂人の作品

● 「絵画三題」（中・一二・一四）

ハーフメイドの美術

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 二〇〇一　長谷川等伯　今回のトピックス　展覧会・観光

● 「絵画三題」（中・一一・一四）

● 「絵画三題」（中・一二・一四）

● 「絵画三題」（中・一三・一四）

サキのコーナー

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 「ＮＨＫ美術館」（中・一一・一中・一二月）

（大学図書館蔵書展示）

こまいの画廊散歩

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 「ＮＨＫ美術館」（中・四・一中・一〇）

● 「絵画三題」（中・一二・一中・一二）

絵画画廊巡の旅

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 「東田直矢絵画」（中・四・一中・六）

● 「絵画三題」（中・一一・一中・一二）

ハーフメイドのコーヒーはいかがですか？

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 「絵画三題」（中・一一・一中・一二）

画廊日誌世界の旅

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

● 「絵画三題」（中・一一・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一二・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一三・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一四・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一五・一中・一二）

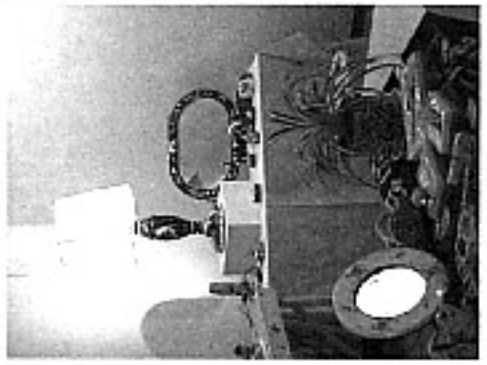
● 「絵画三題」（中・一六・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一七・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一八・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・一九・一中・一二）

● 「絵画三題」（中・二〇・一中・一二）



絵画の価値はどこにあるのか？

● 「絵画三題」（中・一〇・一中・一四）

● 「ミーティングルームのルノワール」（中・一〇・一中・一四）

● 「絵画三題」（中・一一・一中・一四）

● 「事務室　長谷川等伯」（中・一中・一中・一四）

● 「ヨコハマ美術の系譜」（中・一中・一中・一四）

● 「絵画三題」（中・一二・一中・一四）

● 「絵画三題」（中・一三・一中・一四）

● 「絵画三題」（中・一四・一中・一四）

● 「ＵＦＯ　のＣＭ　今泉篤男」（中・一四・一中・一四）

● 「絵画の価値はどこにあるのか」（中・一四・一中・一四）

サキのコーナー・サイン

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ

今回はまたまたＩＴＴＥＮ　絵画の価値はどこにあるのか？　二〇〇一年の絵画の価値はどこにあるのか？

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一一・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一二・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一三・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一四・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一五・一中・一五）

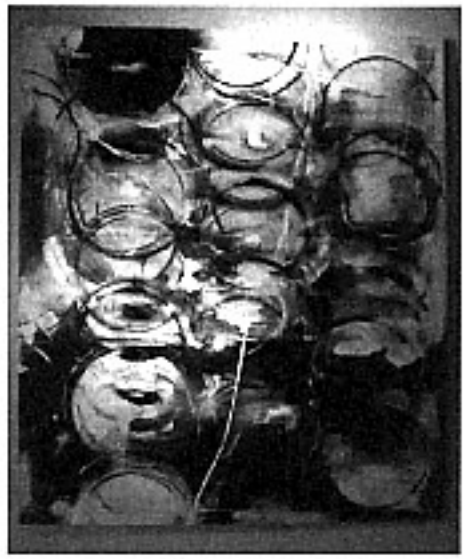
● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一六・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一七・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一八・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一九・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・二〇・一中・一五）



ＩＴＴＥＮ絵画No.２５之０８

ＭＯＭＡ・コレクション

長谷川等伯 ©ＭＯＣＯＮ・ＮＨＫＫＩＤＯＫＩＫＩＫＡＩ（ＭＯＭＡ　ＭＯＭＡ）

● 「Ｍｅｅｔ　Ｍｅ　ＩＮＯＵＥ」（中・四・一中・一五）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一一・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一二・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一三・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一四・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一五・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一六・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一七・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一八・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・一九・一中・一六）

● 「ＩＴＴＥＮ絵画」（中・二〇・一中・一六）

―東電OL殺人事件―」(七・七)白鳥マリーさんの独演。豊穣さの舞台の背景には、赤・灰・白の飛沫のある黒の板。奥台両脇には白い布が何枚もさがる。マリーさんは赤い長襦袢のみを羽織り、裾を乱しながら見入もの役を演じる。吃音表現には鬼気迫るものがあった。(H・T)

● 「オグリキャップアート展」(七・一四―七・二二)

四季の彩

熊本市上通4・1・10トラヤビル ☎351・8332

● 「女性の描く小さな絵の物語」(七・一―七・三一)。在熊の女性作家二三人による、サムホールを中心にした小品展。風景・花・抽象などのモティーフに小さい作品ながらベテランから新人までそれぞれ個性的な表現で魅力ある展示だった。(K・T)

島田美術館ギャラリー&島田美術館浄月庵

熊本市島崎4・5・28 ☎352・4597

● 「天草出身の画家展」(七・一三―七・三一)が開催された。版画の作品展。暗い画面が特徴的だ。子どもの頃におそれつつも親しんでいた闇を感じた。神社の森を描いた作品があり、印象的だった。(K・K)

画廊喫茶ジェイ

熊本市大江本町6・9(秋晴天満宮前) ☎372・8732

● 「眼に魅せられて―第4回水墨画探求展」(七・二―七・一〇)は、日田崇子さんの指導する、TKU西日本文化サークルくまなん水墨画のメンバーの集まり。風景を中心に、素朴だが丁寧に筆が進められていた。また、「水彩画同好会グループ作品展」(七・一―七・二〇)、「セブングループ水墨画作品展」(七・二一―七・三一)も開かれた。(A・S)

カフェギャラリー　三点鐘

熊本市手取本町3・8行切ビル ☎326・3040

● 「かがやき協油彩画作品展」(七・一―七・九)は、屋久島の自然をモチーフに描かれた抽象画の作品展。烈しくぶつかりあいながら生まれ、また死んでいく生命のエネルギーを感じさせた。色彩の鋭な美しさに魅せられるが、うすっぺらな生命賛歌ではなく、死を正しく見据えた迫力があった。

● 「田代晃三個展」(七・一―七・二〇)は、肖像画と熊本の風景画の発表。肖像画は、若い女性をモデルにした作品が印象的だった。作家は「表面に内面が表れること」を踏り、あくまでモデルの表面を描きろうとする。それは、モデルを捉えることで自身の理想を示そうとするのとは自ずから異なり、モデルにモデル自身を見出し、楽しんでいる。その態度が絵の鮮度を常に保ち、魅力的であった。

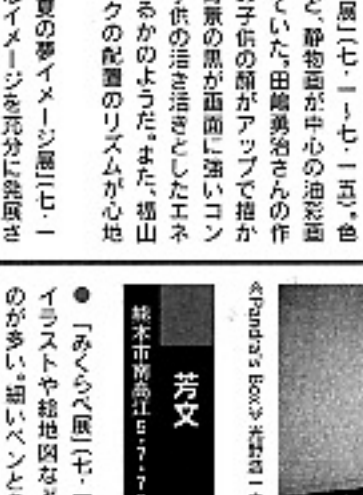
● 「第八回音賞展及び阪神大震災チャリティー作品展」(七・二一―七・三〇)が開催された。工芸作家らが作品を提供し、その収益金を被災地の施設へ寄付する催しは、今年で八回目を数え、記憶の中で災害が次第に過去のものになろうとするのに抗う。三点鐘では、来年以降も継続して開催する予定で、市民の方々のチャリティーへの参加を期待している。(K・K)

熊本県立美術館分館ギャラリー

熊本市千葉城町3・35 ☎351・8411

● 「第一五回KPS写真展」(七・三―七・八)。熊本県広告写真家協会によるグループ展。パート1はたまごをテーマにした一一人の親作でタイトルはテーマEGGS一一。様々なアプローチで卵のフォルムに迫る。一般参加コーナーは「新しい表現を目指す人たち」のために。パート2は自由作品コーナーでモノクロム写真やデジカメ写真をコンピューター処理したものなど。いずれもプロの腕前を見せている。(K・T)

● 「第六四回銀光展」(七・一〇―七・一五)。作風は具象が中心。高宗ちえ子さんの《裏通りの家A》はウジェーヌ・アッジェの写真を思わせるような、即びた感じの、どこにでもありそうでなさそうな裏通りの家が直線、全体を構成する黒っぽいトーンのなかに、格子戸の幾何学的なリズムと、そのほわっとした白や、画面右下の壁の紙屑のくすんだベージュが効果的に配置される。また、故・前川正行さんの《天草の島》は、山から海を見下ろした視点で島々が描かれる。緑と青と白のコンビネーションはすがすがしい。風景が単純化された平行線によって表現されている。美しい自然への畏敬の念とそれを研ぐ純粋な喜びが感じられた。(H・T)



《裏通りの家A》高宗ちえ子さんの作品

● 「中央公民館グループ展」(七・三―七・八)。二〇人の六〇点の油彩作品。日洋会の西生子さん指導の教室展。六号から一〇〇号まで、風景、静物、人物画など写生を主にしたもので、いずれも時間をかけて誠実に描いた作品。郷和日秋さんの《シクラメン》五〇号はピンクの花と緑の葉、布の赤と青がやや沈んだ色調ながら美しい。

● 「日本水彩画会熊本支部展」(七・三―七・八)オーソドックスな描写の水彩画二二点。大倉武憲さんの《北外輪》は明暗の調子の力強く、写実のよさがあり、下田昭二郎さんの《信州の旅》は水彩の技法をよく生かした作品。池崎生洲さんの《二の倉沢》は誤認なく誠実な描写が好ましい。遺作であることが惜しい。中田保さんの《風景》、山口幸夫さんの《情林の発状》など、いずれもベテランの安定した作品。

● 「第一八回真象展」(七・一六―七・二二)日洋展に出品するグループの研鑽の成果を発表する展覧会。三七人が大作を一点ずつ出品。ベテランのより前へ進もうとする意欲的な作品の中に、新しく参加し人の新鮮な作風が混じり、見ごたえのある展示となっている。

● 「中国水墨彩墨画グループ華苑林展」(七・一六―七・二二)

● 「第九回熊本建築パース展」(七・一六―七・二二)。熊本、福岡、名古屋の作家二二人の出品。透明水彩、カラーマーカー、コンピューターグラフィックスなどいろいろな表現法で描いた建築パース作品。設計の意図を分かりやすく表現するという実用的な目的を持ちながら、作家の独自性も見られ、表現の工夫をこらしてできばえを競っている。

● 第一九回絵画グループ画楽多展(七・一六―七・二二)。同じ教室で学んだ人たちの一九回も続いているグループ展。絵の好きな一一人の出品作は、素朴なものも混じって個性的でのびのびしたものであり、それぞれの作家の中に描き続けるエネルギーを感じさせる。

● 「示現会展」(七・二四―七・二九)。今春、上野の都美術館で開催された示現会展に熊本から出品した二一人の大作を中心に展示。しっかり描きんだ重厚な作品が多い。小材雪治さんの《残された形》は古墳の壁画を題材にしたもので、美しい色彩で表現して成功している。松井天一さんの《川》は水と岩の描写に魅力があり、黒い水面が効果的。小材敬子さんの《アトリエのひまわり》は枯れたひまわりが美しく、壁の白とひまわりを置く棚の黒い面の組み立てが面白い。

● 「原健太郎木版画・岡橋成作陶展」(七・二四―七・二九)。原橋成さん、健太郎さんの親子展。父親橋成さんは蟹、栗のリアルな表現の焼き物と、辰砂や土を生かした壺などを出品。一九七七年熊本生まれの健太郎さんは米モンタナ大学で絵画、版画等を学び、帰国後父親に陶芸を学ぶ。大小の画面の木版画二三点、油彩一点と作品実験的な釉薬を施した陶板九点を出品している。熊本で作品を作り続け、発表し続けるその情熱に期待したい。

作家の顔　陳太郎さん

● 「中村征夫展」(七・二四―七・二九)。水中写真で海の魅力を表現する中村征夫さんの「沖縄羽湖海道　熊本・天草のうみ展」。併設の「石坂環・天草を撮る」は中村の助手を勤める熊本出身の石坂環さんが天草の海を撮った作品。熊本の若い力が一流の写真家から学べるチャンスをぜひものにして欲しい。

● 「美術文化熊本支部展」(七・二四―七・二九)。熊本から美術文化店に出品する一七人の作品。以前は熊大出身の美術の先生が多かったが、新しい人も参加して充実した展覧会となっている。抽象からシュールなイメージのものまで、それぞれ個性のある表現で幅広い作品。宮崎昭吾さんの《ポートレイト　01―A》は永年手がけてきたモチーフが、洗練された表現となってきている。(K・T)

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町6・13北部ビルIF ☎343・9664

● 「第四回きさらぎ会展」(七・一―七・一五)。色とりどりの花や果物など、静物画が中心の油彩画が一〇点ほど展示されていた。田嶋勇治さんの作品《活》は、物思う表情の子供の顔がアップで描かれる。黄色いシャツと背景の黒が画面に強いコントラストを生み出し、子供の活き活きとしたエネルギーをも表現しているかのようだ。また、福山英子さんの《花》もピンクの配置のリズムが心地よい。

● 「第一一回八雲通り夏の夢イメージ展」(七・一六―七・二一)。幻想的なイメージを充分に発揮させた作品がそろった。女性の魔性や、夏目漱石、ラフカディオ・ハーンの怪談をテーマにした作品もあり、また一方、雪女やを山を題材にしている作品は猛夏に涼しさをもたらしていた。(H・T)

ギャラリー武智

熊本市水道町4・17アートビル2F ☎351・8332

● 「ハンヌ・パロスオ展　白白」(七・五―七・二四)。フィンランド出身で、今はイタリア在住の作家。いくつかの物語とその影が広い空間に置かれ、ほとんどモノクロームの油彩によるシンプルな構成は、見る人に自由なイメージの広がりを促す。本人も来熊して会場で作品を前に、作品の背景となる自分の考えを解説していた。(K・T)

● 「光野浩一展　インスタレーションとオブジェ」(七・二六―八・七)。熊本では初めての個展である。黒の矩形と白文字のアルファベットで作品を表現するせいか、静謐な空気が漂う。アルファベットを選ぶ理由をたずねたら、「日本語はあまりにも生々しく、意味のずれを感じさせるので…」と語ってくれた。《Pandora's Box》は、インスタレーションで、作品の上を歩くことが出来る。骨箱と同じ比率で拡大した光沢のある漆黒の箱を台座の上に据え、周辺に数え切れないほどの黒いフロッピーディスクがばら撒かれる。そのフロッピーひとつひとつに「THEY」「SHE」「HE」など白文字で書かれる。集合体としての黒が生み出す存在感とは裏腹に、フロッピーディスクの踏み心地はあまりに頼りない。パンドラの箱の中に残されているのは、「I」と書かれた黒いフロッピーただ一枚。ディスコミュニケーションの異延するなかでも、希望をもって生きる人間を映し出す。(H・T)

《Pandora's Box》光野浩一さんの作品

芳文

熊本市新市街E7・7・76 ☎311・3344

● 「みくらべ展」(七・一―七・八)。宮崎さんの作品。イラストや絵地図などすでに印刷物になったものが多い。細いペンと色鉛筆や水彩による丁寧な作業で暖かみのある表現となっている。他に印刷になることを前提にしたような野菜のカットや絵手紙、コンピューターで描いた人物など、小さい作品ながら、その幅広い表現に感心する。(K・T)

おばけの金太 人形師

厚賀新八郎さん

SUITOTTO*KUMAMOTO

連続インタビュー NO.2

この連載では、熊本にお住まいで、さまざまな芸術ジャンルで活躍されている方々に、制作活動によせる熱い思いを語っていただきます。第2回目は人形師、厚賀新八郎さんに「おばけの金太」の楽しいお話をお聞きしました。

略歴：1943年生まれ。活人形師安本亀八の流れを汲む西陣屋片代目。干支のからくり人形も制作し人気を集めている。いまは腹話術の人形も開発中。

―― 熊本は松本喜三郎と安本亀八の二大活人形師を生んだ土地柄です。この「おばけの金太」にもそうした歴史と背景があると思うのですが、そもそも「おばけの金太」はどこから生まれたのでしょうか。

厚賀：もともとの由来は、加藤清正の築城のときに、疲れた人たちを笑わせて励ましたひょうきん者の足軽の「金太」がモデルで、その逸話を元にして五代目彦七が発案したと言われとります。五代目の頃は江戸時代の後期ですから、文楽人形が流行していた時代だと思うとですよね。父の若い頃まで、うちにも文楽人形の修理がずいぶん来たように聞いとります。文楽人形は、紙芝居の立体版みたいに、こんな大きな木箱に（両手を広げて）人形を何体もいれて、担いで回ったらしい。文楽人形と「金太」はからくり的には良く似とっとですたい。ただ、なんで真っ赤なのかと言われるとこれはもう分からない。昔から赤い。酔っ払ってという話があるとですけど、分からない。昔はね、清正が高麗門ちゅう門ば持って帰ったったい。あそこに高麗門ばこしらえたとたい。町の名前で残っていますけどね、あそこですたい。高麗門の事ってあったとですよ、植木市もバーッとあってね、そのあたりでも「金太」は良く売られていた。

――「金太」の魅力はある種の悲しみをたたえているところではないかと思うんですけど…。

厚賀：例えば、博多人形というのは、綺麗さというのが大事なんですね。でも金太っていうのは、郷土玩具になるのですが、この「おばけの金太」っていうのは、べろ出して、人を笑わせて、いわゆる三枚目で、ひとを笑わせるその人の心の中は哀愁があるような気がするんですね。眉の書き方が、こういう風にね、下がって。決していい男ではないけん、よかですね。人を笑わせて、人が喜んだのをみて喜びを得るって言うのが。それはね、悲しみを持っているから、出来るんだと思うとですよ。そこに人間らしさを非常に感じます。（目じりを指さして）もうちょっと、グーッと引くと、涙が出てくるんじゃないかって言うくらいの感じさえするとですよね。だから、おっしゃるように、なんか人間の悲しみみたいなものを湛えているっていうのが、多分「おばけの金太」の一番のそこにある魅力かもしれませんね。でも怖いのは、人形は誠心誠意が入るっていうかな、作るひとの精神性っていうのが現われますよね。だから怖い。自分の私生活の心の持ち方っていうのが、否応無く写される。いい絵画も、精神性を訴えてくるじゃないですか。それと一緒で、自分の心が写りやせんのかと心配で。（笑）

―― 私は海外の美術館に行くときは、いつもこの「おばけの金太」をお土産に持って行くんです。いま「金太」は熊本の顔のひとつといっていいと思うのですが、これからの「金太」に対する思いを最後によろしくお願いします。

厚賀：私は、この「金太」が何べん人を笑わせてくれるかなとか、どんな気持ちで贈られたかなとか、苦しいときに喜んでもらえたらっていう思いを込めて、選んでもらいたい、ほっとしてもらいたい、と作っとります。かつて團伊久磨さんがグランドピアノの上に金太だけをちょんと置いている写真を、あるグラビア雑誌で見たことがあって、それで作曲されたということで。その時に私はまだ２０代で、「思いを込めて作らなくては」と気持ちを引き締めるきっかけとなりました。人それぞれの色んな思いで買ってくださって、「金太」がその人と共に生きていくということは、嬉しかですね。「金太」と熊本の距離をもっともっと縮めて、厚賀の「金太」ではなく、熊本の「金太」として、もっともっと熊本市のお役に立っていきたいと思います。

―― ありがとうございました。

（7月２３日、於・厚賀さん自宅工房、聞き手：南嶌　宏）

お知らせ

子供の頃に買ってもらった「おばけの金太」を
大事に持っている方、美術館準備室にご一報ください。
あなたの思い出の話をお聞かせください。

編　集　後　記

横浜市で国際美術の祭典「横浜トリエンナーレ」が始まりました。世界30ヶ国、100名を超すアーティストによる作品は否が応にも私たちを挑発し、現代の美術の多様性とその奥深さを教えています（11月11日まで）。しかし、そうした世界的なアーティストたちも、原点は自分の生まれ育った町の小さな美術館や画廊での発表から出発したことを忘れてはなりません。つまり、たった一人の、孤独な、一回一回の命がけの発表の積み重ね、その勇気が芸術の歴史を築いてきたということなのです。私たちはこの熊本で、世界につながる皆さんの命がけの発表を真摯に受け止めたいと思います。世界は遠くないのです。それが命がけのものであるかどうか、すべては私たちの眼の前の作品に表れているということなのです。

（学芸課長　南嶌　宏）

発行元／ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.3　2001年9月15日発行／無料
編集人／田中　幸人
編集長／南嶌　宏　　担当／冨澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合
発　行／熊本市美術館設立準備室　〒860-8601 熊本市手取本町1-1
TEL.096-328-2747　FAX.096-359-7892

寄稿者紹介

兼城 昌山 (K.S)
Shozan Kaneshiro
送られた人の作品は、調和のリズム、生きた余白など、表現のたくみさ、うまさが見てとれる。さて、自分で書くと、うまくいかぬものだ。

森山 秀吉（淡草） (T.M)
Tansou Moriyama
書道展で、厚賀氏の作品を拝見させた人の力作を久しぶりに見て感銘を覚えた。自分の作体験見に感謝、反省もしきり。

田代 晃三 (K.T)
Kozo Tashiro
誰に頼まれたのでもなく好きでものを作っているのだから自分の力は自分で信じないと。

学芸員紹介

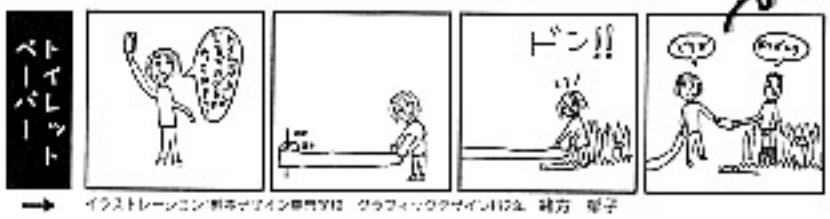
本田 代志子 (N.H)
Yoshiko Honda
今日まはちょっと遅めの夏休み。友人との再会、結婚会など帰先での日程調整に忙しい。

坂本 顕子 (A.S)
Akiko Sakamoto
展覧会とワークショップを見に、東京・横浜・京都と休日ごとに出張。休みが欲しいよう。

金澤 謙 (K.K)
Kenkyu Kanazawa
「一人でカラオケ」続行記録大幅更新。7時間。たまってたんだ。ほっといてくれ。

冨澤 治子 (H.T)
Haruko Tomizawa
自宅で箱を開けたら赤とんぼが今年もやってきた。秋の訪れを感じる今日この頃。

2001年度美展「デザイン部門」で協会賞を受賞しました。



イラストレーション：熊本デザイン専門学校　グラフィックデザイン科2年　緒方　華子